

退分帖



04  
69



6208  
04

車の急乃水を乞梢の輝り  
取葉を吐く水皆さ乃美の  
外子乃子あり流るるに舟を軽  
山乃公作ら今西教陳今  
凡情子乃倦而子睡  
子取亦之と臨る昔より  
る謝ありの似たり阮籍  
河々一橋乃表新成いと

6298

かみ垣敷を涼す御——柳  
首を仰ふも造化を乞ふは海  
おちすも——字後よろしく  
情吹の味を追く分ちす  
む——思——私——佳  
りた乃斑下を求むは——川  
春の月乃うや——春を掛ひ  
おしつ指のくく流るぬい却

ふきをなほ——呼吸を御  
つれ——うし——海——わい——西流り  
まゝや一糸の糸乃影を流し  
面ふを生じ塵を御し  
作り禁安の風流治るを  
す晴空をよすねく——を  
禽乃おのつららよは花の葉の  
凡を待——うまゆ秋のまゆ

あしこころの影を籠り乃所のほろ  
あるふらふらみよ小蜂のまき  
一層ふくまらうよ情をまきで  
四五の池乃群お早の遠が  
ふらふらのまきとまきナリ

晴冬也

半明居

清と初

補陀落岸のまき

どんがけいしほまの池

きのまじん中ほ

うらまゝまゝ

久しかりしに梅

よもいぢうと花と木も

鬼わの餅麗ありのけしき

元生りのこれいそ

こそとらうの追分給

珍書

四

日の光

漢

降



後

珍書

妖  
俗  
乃  
あり

俗  
如  
大

れ

あ  
ま

如  
俗



我  
思

五

頬  
ツラ  
ら  
る  
る

か  
こ  
ら  
る  
る  
如  
子  
々

蓮

ハ

死

言  
承



檢校勾當衆堂衆分城方都方帳無官之平座春夏兩度  
 洛高倉清壽庵尔集會而職神祠其夜來柳瓶  
 供御莊嚴結構妙音琵琶響演之艶乎磊々剪々  
 曉天今奥圖畫而題余云寔以不助音咄口句嘔出  
 云爾

鳥羽玉の

らるや

吹はく

積塔會

陰花堂

晚山



六

土島

久保柿三ッ

長ノ市

鳥島

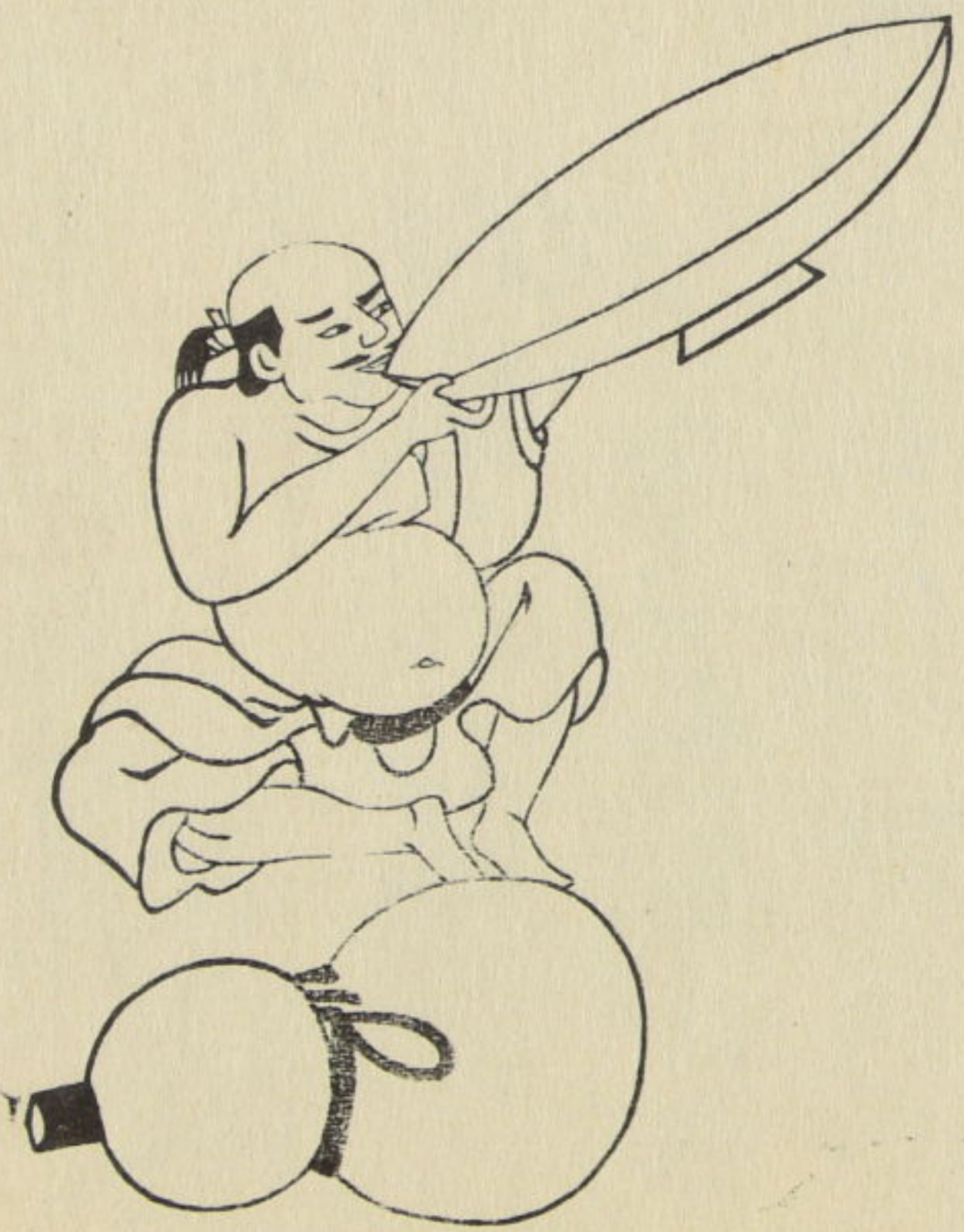
土島



唐風琴

張果之

与  
出  
之  
法



阿不切乃

猫丸

部

の

靴石



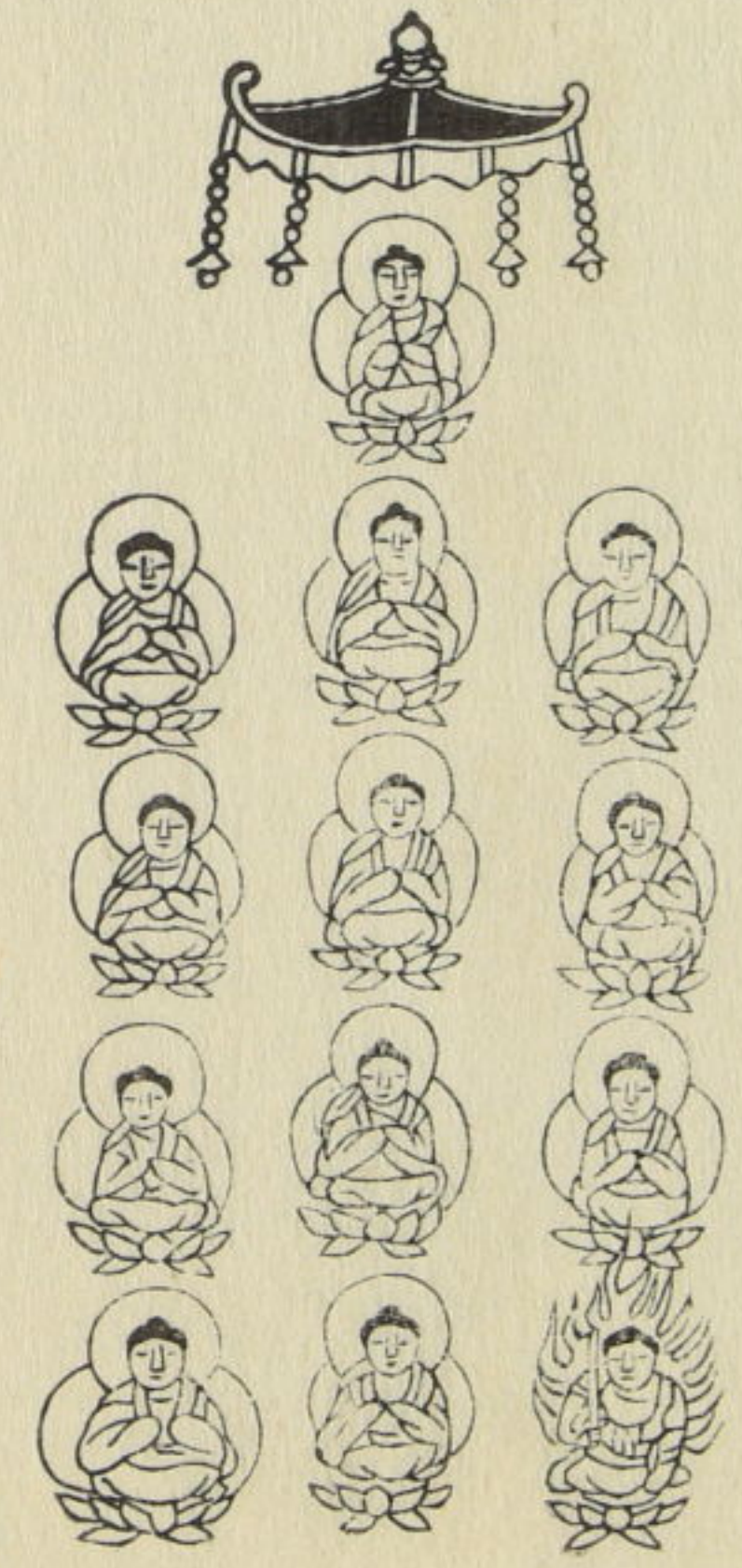


思ひ  
 志  
 伊江の  
 草紙  
 志  
 三カ  
 遷  
 一  
 さ  
 一



聖物

八



海東子觀松片陸  
 電鼓  
 ありおん道

園入るるや

あつたよ

身れ

ひねり

路通



九

や

や

あ

ホツキツホ

あ



三味線の

ひら

と  
は

嫁  
君



+

松崎  
郁翁

竹  
虎

虎

夏  
曆

如



木  
角

西  
角

雅之入

去の應心奉り八宮

浮軒



十一

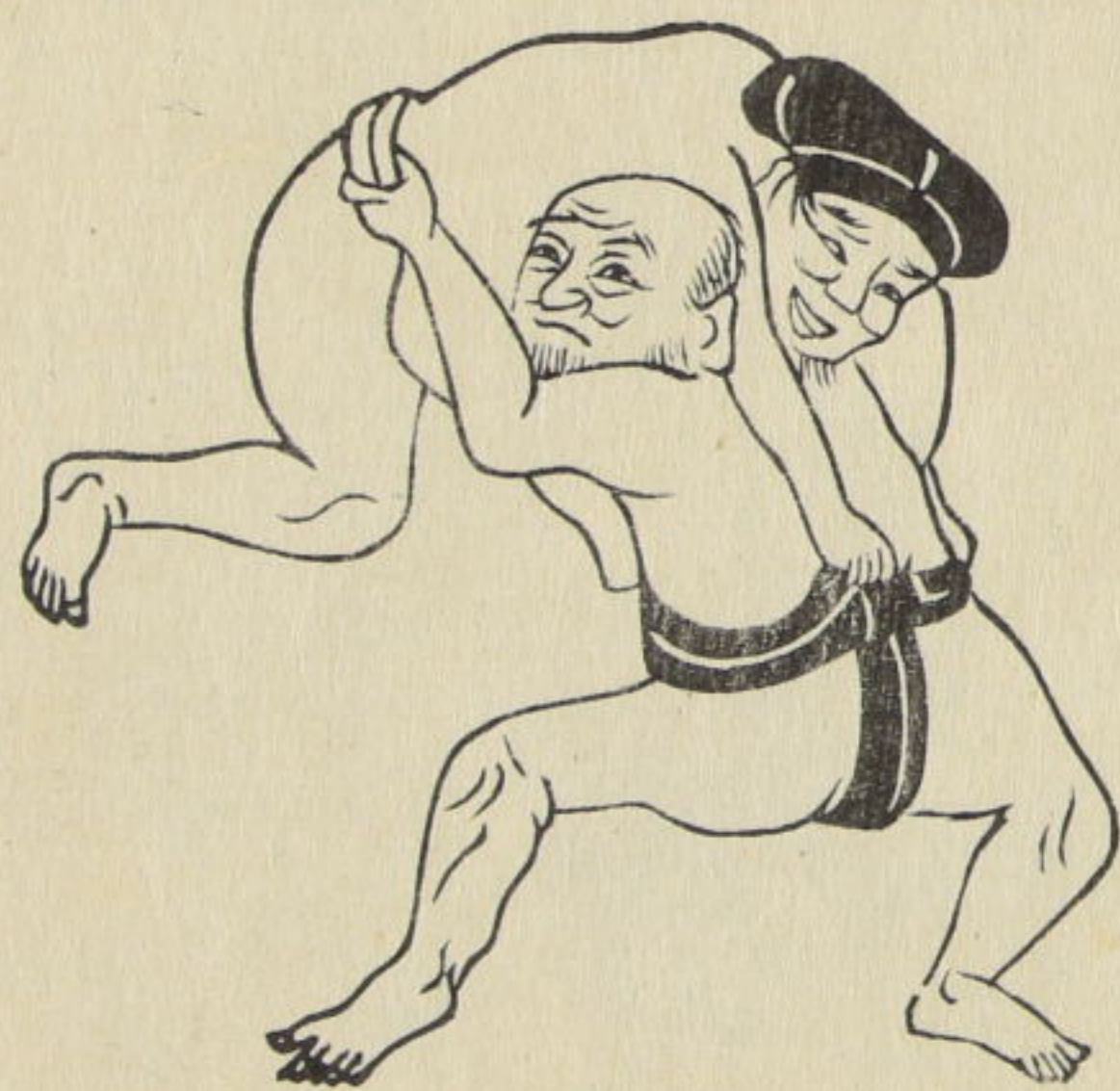
猪角此

いんぎん

心

あか丸

孝



竹宇

藤浪又は  
結良無上  
希

老松軒怪石



里石

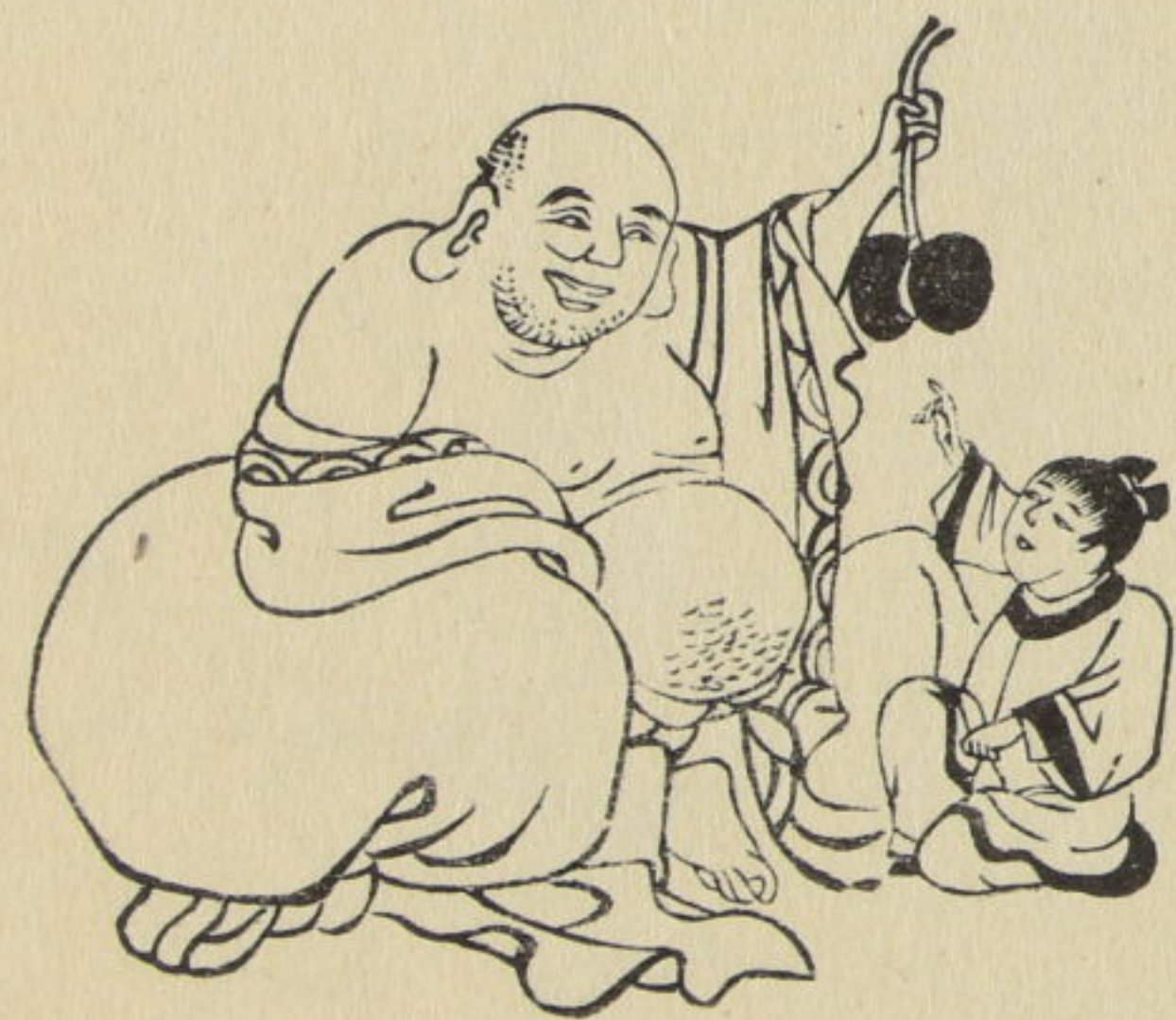
耳より剃毛の二つ  
これ葛蒲



拵子

饅頭乃木色

布少く路



水色

由(髪)髪より青毛傍穿雪比袖 暮四



サイバリの  
茶張の

所て

すみ

東歎

踊  
の



おし  
おし  
おし  
おし

人  
ま  
鼻  
根  
こ

遠  
小



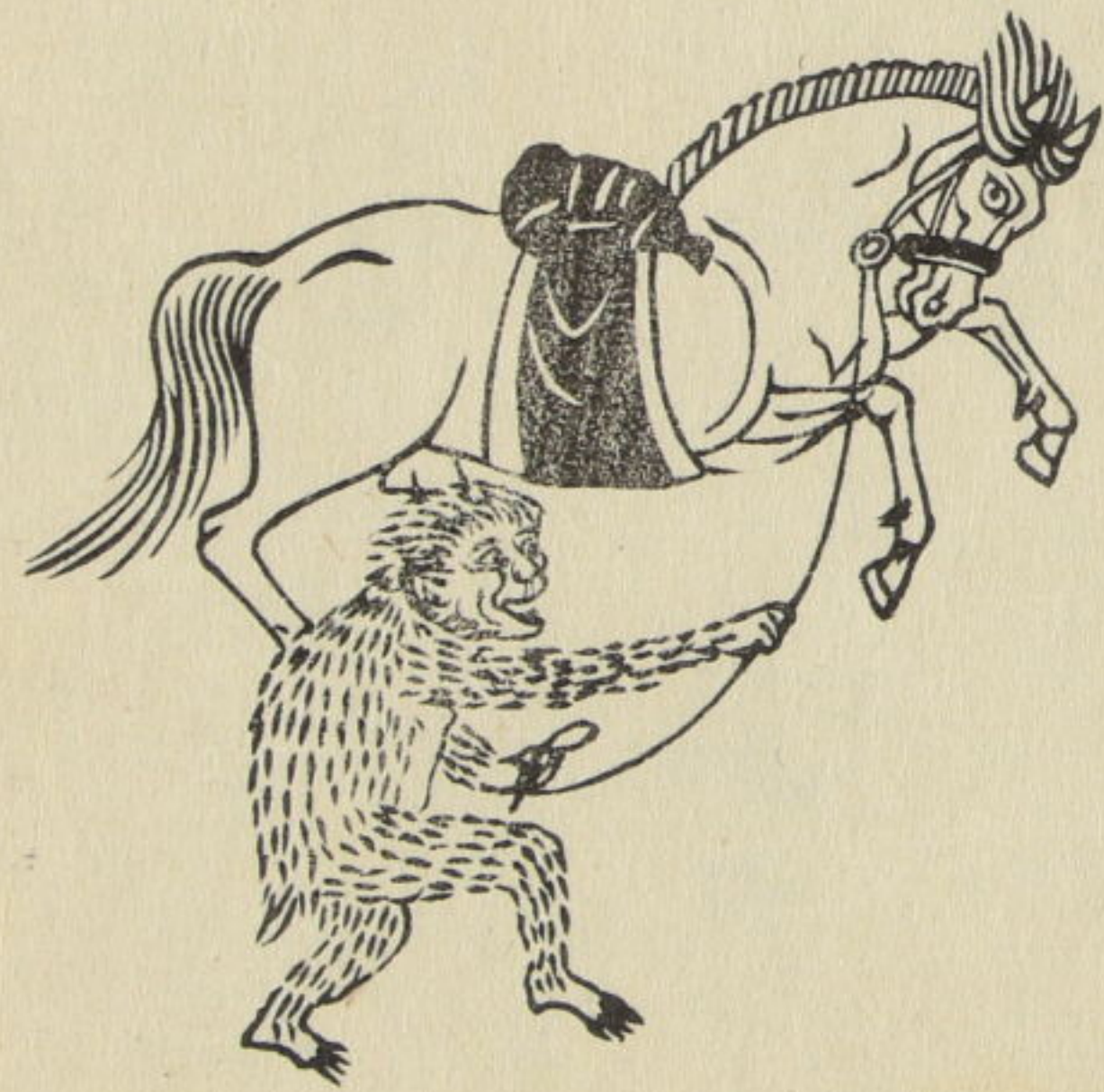
猿  
聲や

大  
阪

い  
ま

月

乃



戸  
田

新

川

丁  
我

十五

所  
ら  
し

浦  
之  
こ  
の  
せ

物  
子

浦  
の  
舟







おろし

吐<sup>トウ</sup>公早張心金<sup>カネ</sup>

おろし

ちう



桶

ハム

おろし

おろし

鬼腫

曲源一折の之は娘



景

序

也

出

格

奇

草

志

繪

器

作

雲且



十七

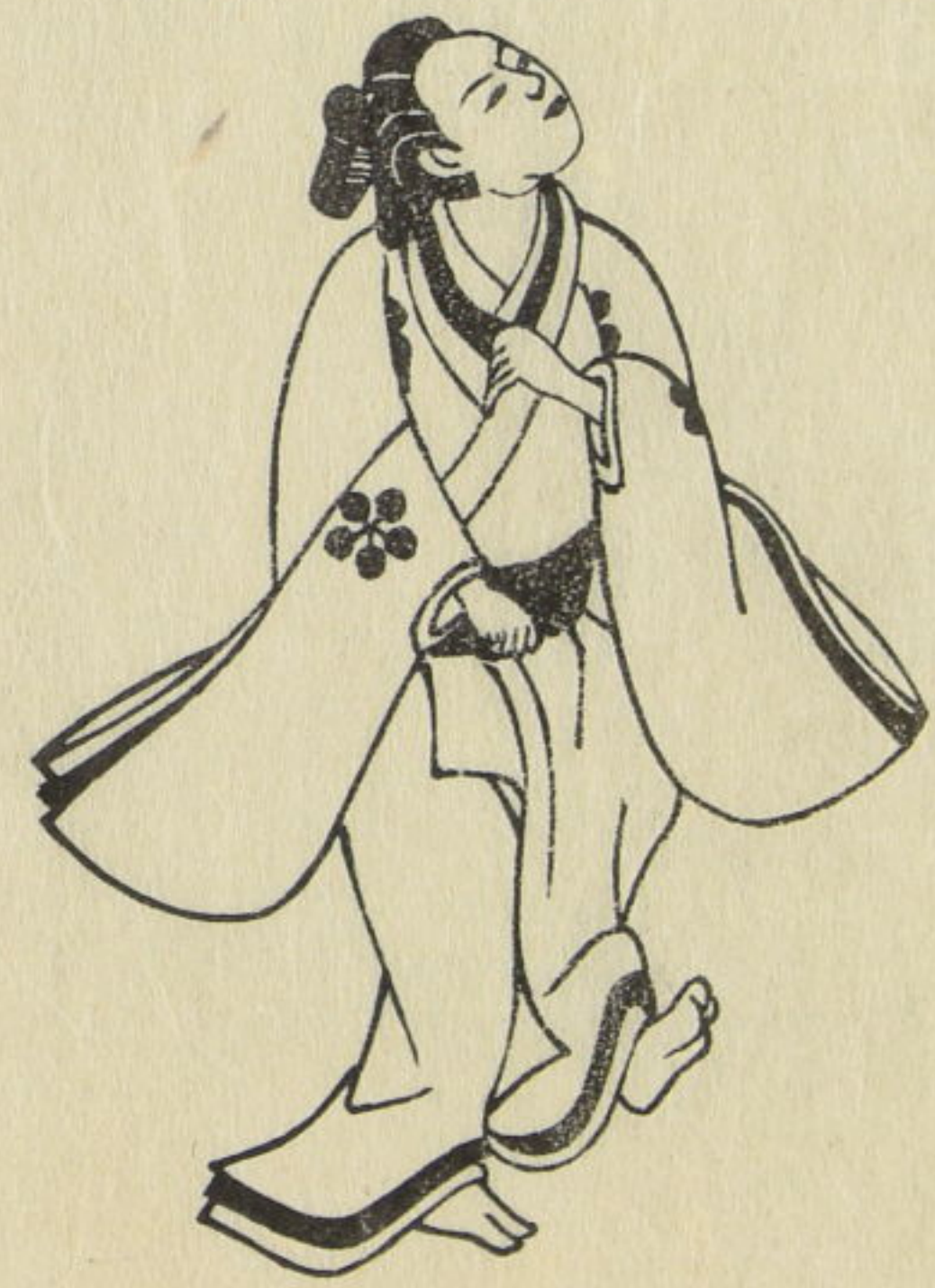


白筆丸平白

三乃

古筆

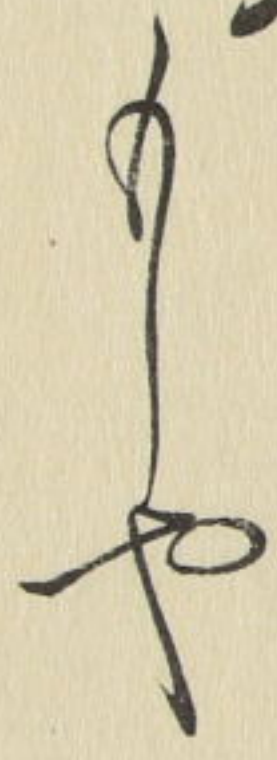
水包の



石五郎

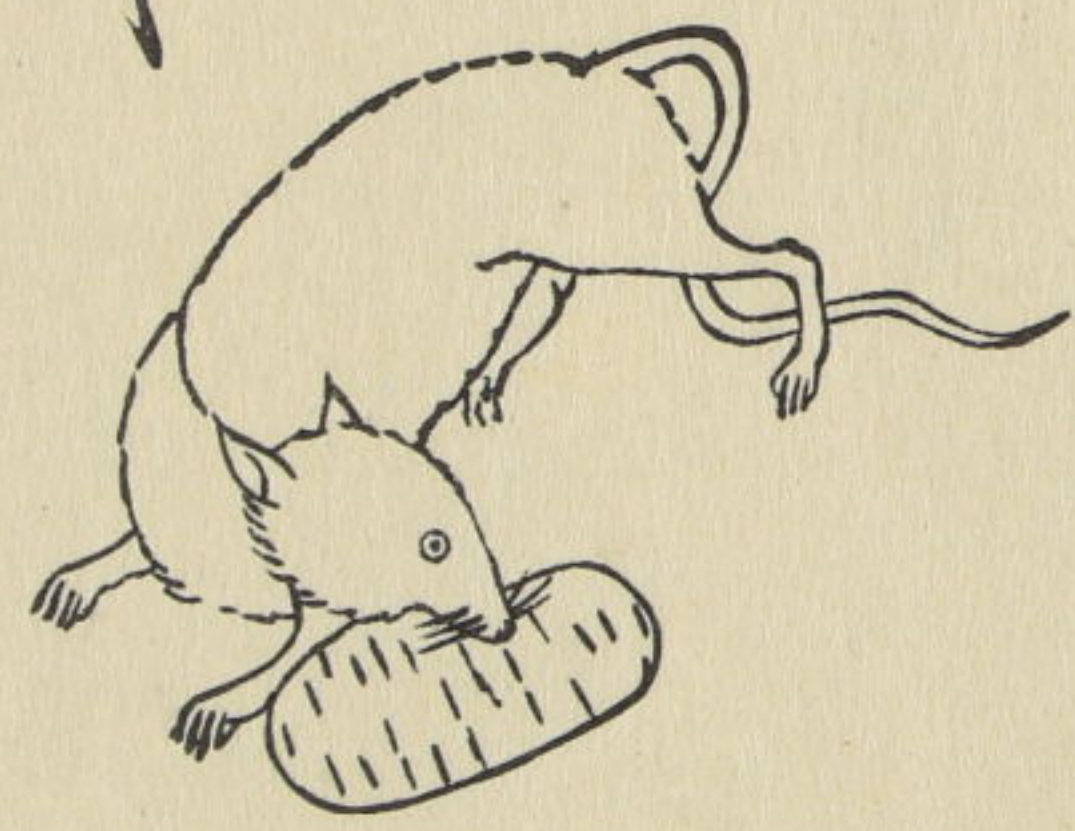
鼠毛

小

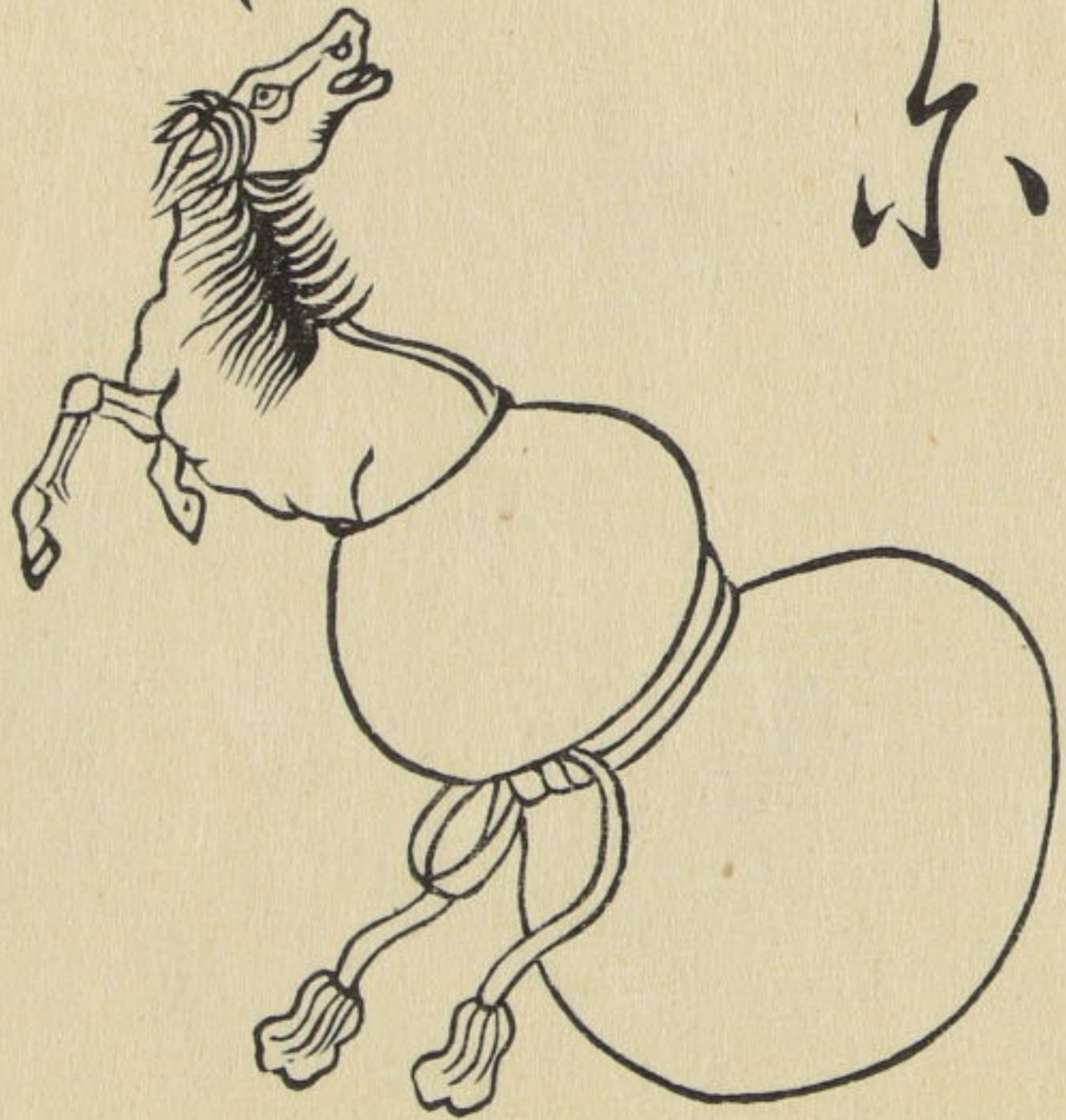


水作

七



洗く  
 かた川尔  
 中  
 之  
 金也  
 上  
 河了世

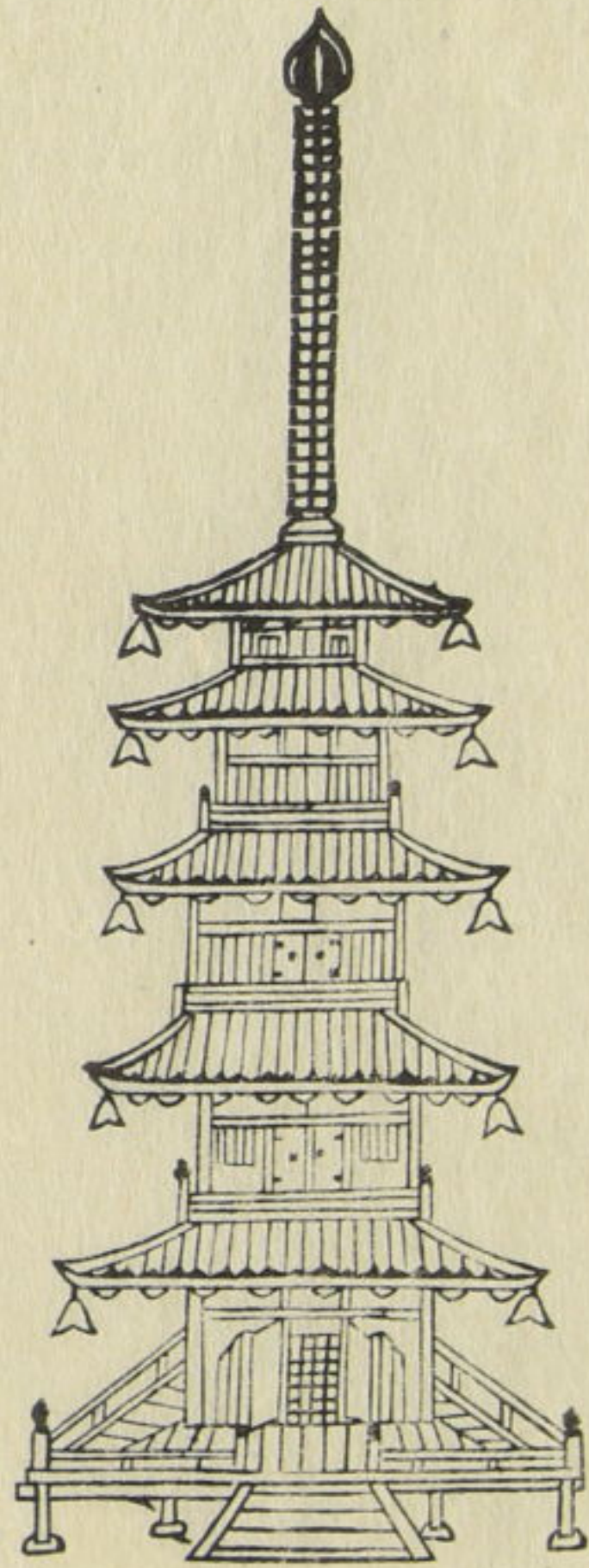


三日月也

九輪乃部く

法今石

主川

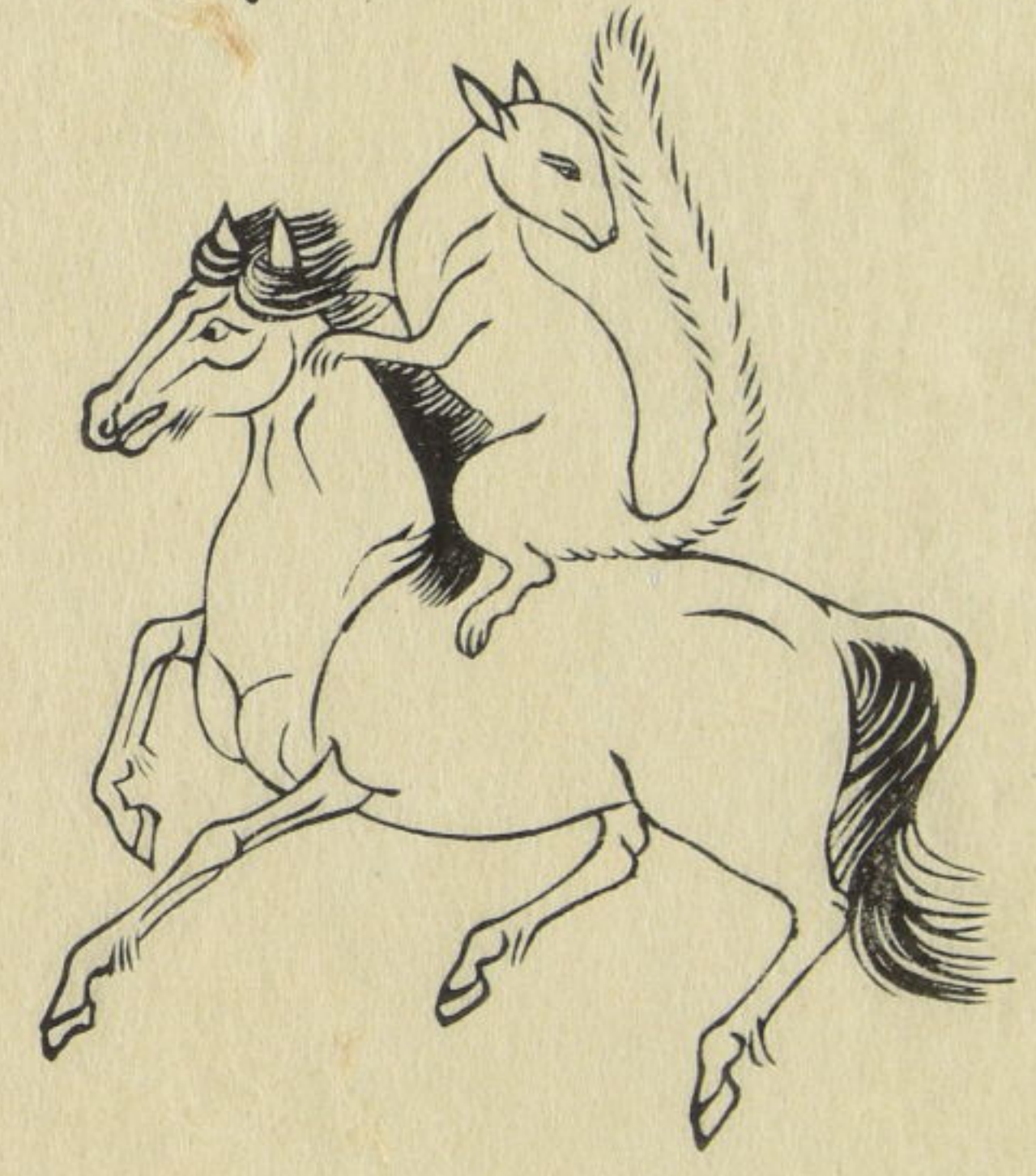


世や綿  
 市綿の癖を  
 人の花  
 子綿



三十一

茶かみ  
 馬人  
 馬  
 子  
 子



流凡

川之妖子

鶺鴒

肩々



琴風

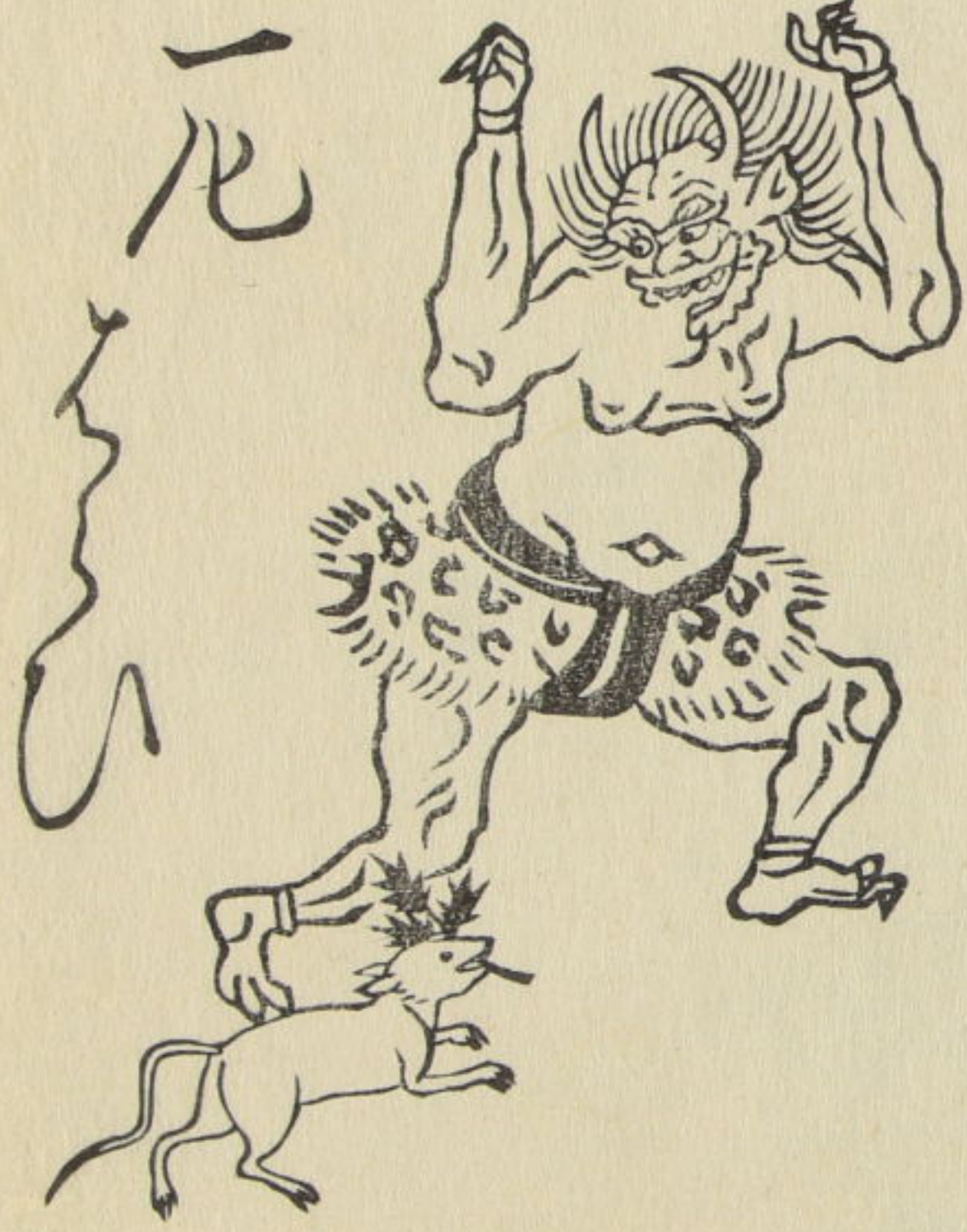
乃乙甲

若架

よろす代也

法使由免除

氷花



元

清田孫

の

外

乃

お



お

子もあり

若鱈とあは

親

仙糖





支瘠也

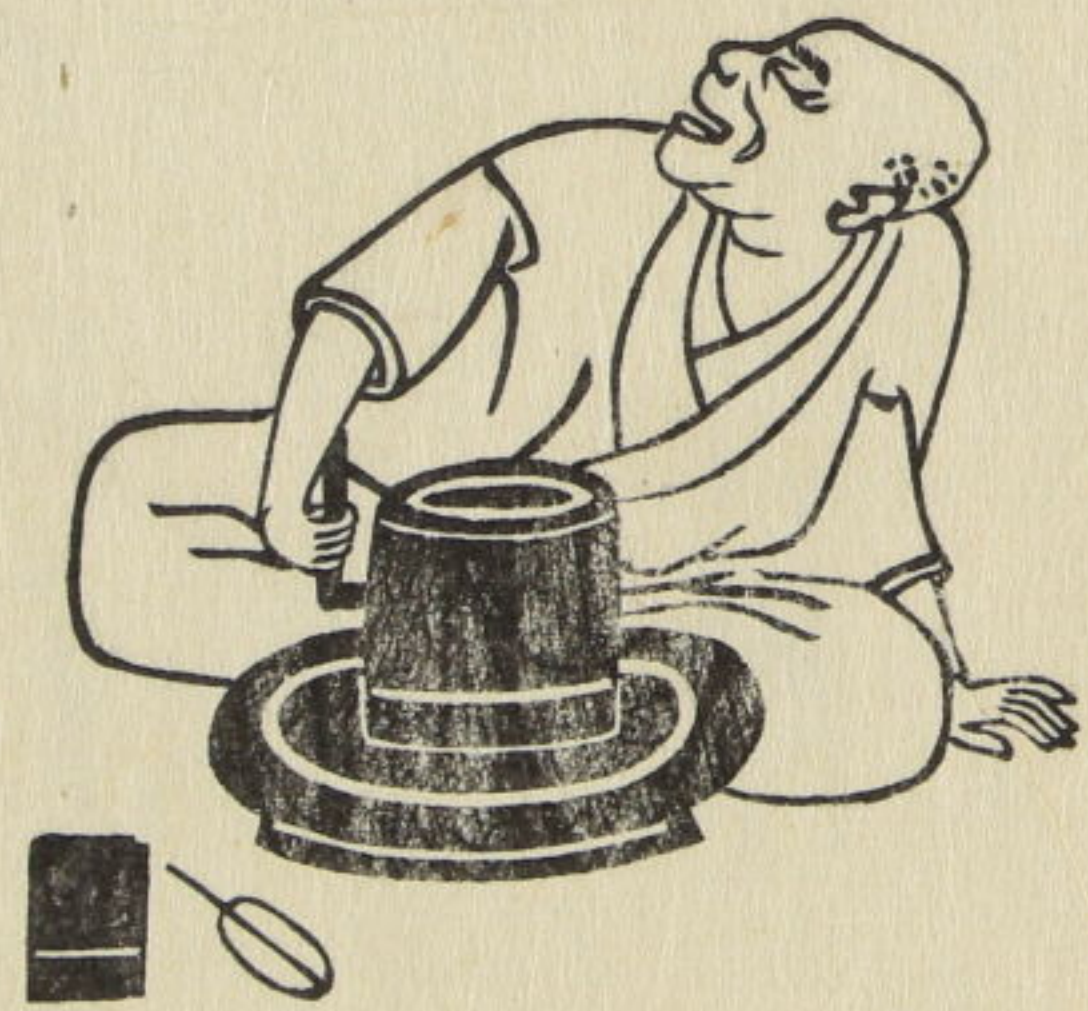
向

門

天

系

尚白

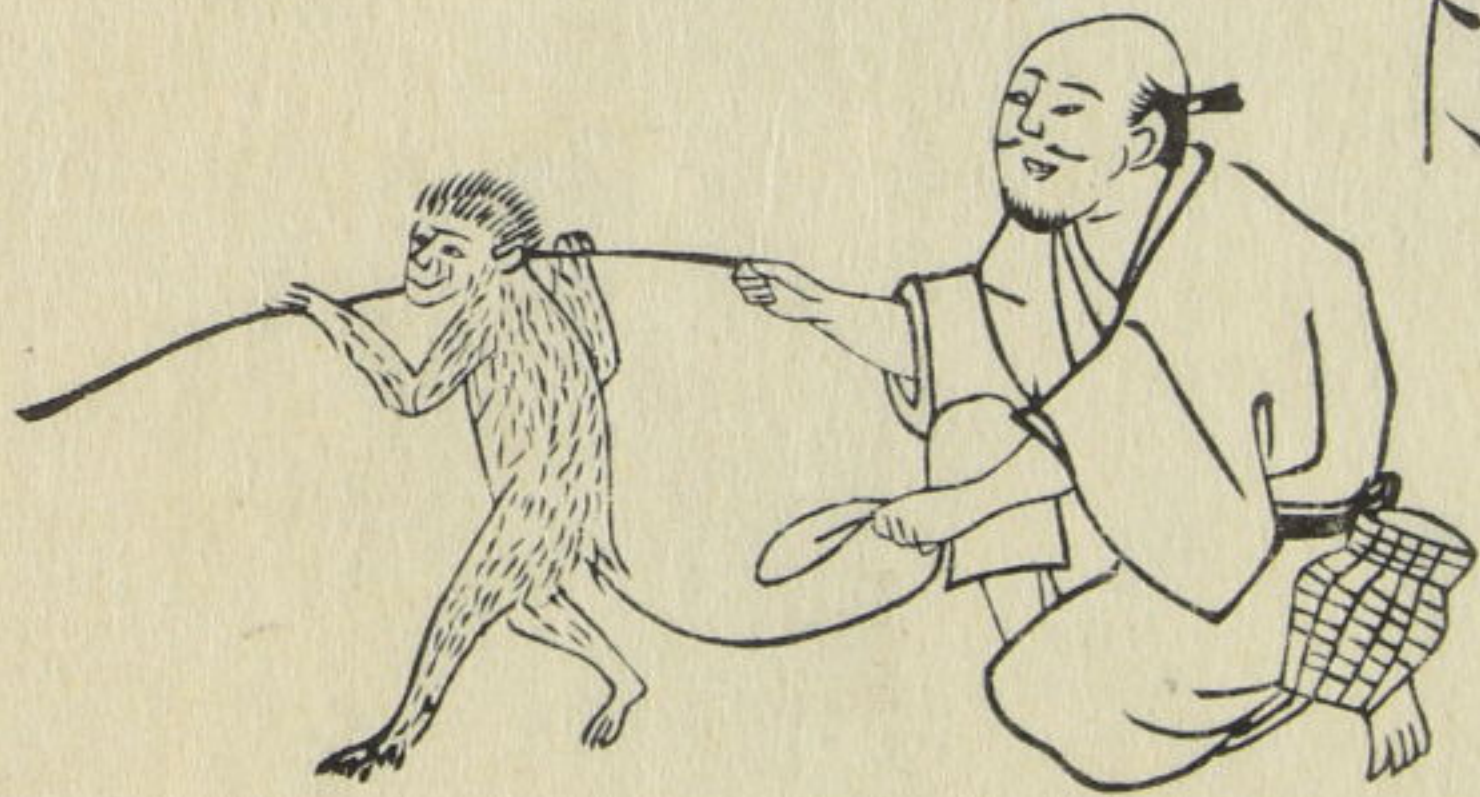


渠之

峰

山

嘉永月



淡々

巾を垂ぬくし菓鷹

を窺ひて

しほし

就鳥の菓を

しほし

しほし



才齋

坊寸真

也長

沛調らせしハ登あるとりか

十一分の子稿とがして

我黒

戸袋の塵掃珍を行嫌

珍舎

下駄乃旅路の像一三ヶ月

長

てはえ返りりりて巖岩根

黒

所々地を武と乃其塵

舎

時雨<sup>リ</sup>人漏む鳩尾の瀧は良 長

襦<sup>ろ</sup>を<sup>ろ</sup>く<sup>ろ</sup>る<sup>ろ</sup>の 雉 黒

一<sup>ろ</sup>乃<sup>ろ</sup>松<sup>ろ</sup>垣<sup>ろ</sup>漢<sup>ろ</sup>系<sup>ろ</sup>振<sup>ろ</sup>まり<sup>ろ</sup>水 舎

木<sup>ろ</sup>綿<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>津<sup>ろ</sup>衣<sup>ろ</sup>式<sup>ろ</sup>了<sup>ろ</sup>物<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ハ 長

白<sup>ろ</sup>扇<sup>ろ</sup>花<sup>ろ</sup>水<sup>ろ</sup>と<sup>ろ</sup>夏<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>浮<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>や 黒

下<sup>ろ</sup>号<sup>ろ</sup>浚<sup>ろ</sup>て<sup>ろ</sup>基<sup>ろ</sup>と<sup>ろ</sup>に<sup>ろ</sup>なり 舎

次六

撞ハ三日七日の 扉守 長

猫也胡桃ハ西<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>業<sup>ろ</sup>同 黒

晚<sup>ろ</sup>月<sup>ろ</sup>と<sup>ろ</sup>云<sup>ろ</sup>然<sup>ろ</sup>し<sup>ろ</sup>あ<sup>ろ</sup>る<sup>ろ</sup>日<sup>ろ</sup>ハ<sup>ろ</sup>西 舎

月<sup>ろ</sup>志<sup>ろ</sup>冥<sup>ろ</sup>書<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>半<sup>ろ</sup>折<sup>ろ</sup>也<sup>ろ</sup>し 長

散<sup>ろ</sup>心<sup>ろ</sup>の<sup>ろ</sup>善<sup>ろ</sup>ね<sup>ろ</sup>と<sup>ろ</sup>汲<sup>ろ</sup>て<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>と<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>以 黒

玉<sup>ろ</sup>砂<sup>ろ</sup>梳<sup>ろ</sup>あ<sup>ろ</sup>る<sup>ろ</sup>葺<sup>ろ</sup>と<sup>ろ</sup>け<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup> 執筆

穂もあつらふも遠きも賊ハ 漢々

人一信乃ち海も水見 珍舎

白いもさ作乃鏡の夕月子 在川

いしぬしやのまの味さ 仙鶴

浪乃も完料のろふ芦れ塵 里右

後還廣し傘乃 軒 也長

後ウ費乃ちあふ産して淋さハ 氷花

湯殿ふまゝ神なるハ神 我黒

ちと折てあ乃日所とけうる 執筆

金剛山々牡丹か花道 漢々

冠者もあらず冷食頃の丁乃夢 珍舎

芳乃海よりえ結乃満 黒石

名月小二王つ動あつへん 仙鶴

何乃月やかゆい玉 在川

礎乃香ふ研て提り焙 皮也長

湯にて飽く筆捨るなり 氷花

朱頃やこ菊とてぬむ 守る 我黒

足乃臺よ若草の南良 也長

二 丁寧小袖いして別と露 淡々

いつとら花乃ともも果へさ 仙鶴

子濫も此や不同小派と小 氷花

凡矢救ハも古手 珍舎

凄くと雲のあはを蜻蛉也  
在川

佐渡ふらたしは堂と銘  
淡々

音月乃字老もあはぬ編り  
里石

刻と柘榴ハ齒並む  
我黒

殿産と乳ハは家お雲ふ自  
珍舎

い乃ハ屏風子流と書  
氷花

漉とむ二か乃粥を振草也  
也長

留付乃書ふはむ鞆掛  
里石

末人よ膝ふを裁草か林草  
我黒

湯汲車と拵を撞撞  
在川

冥乃舟のかげを流しぬれ響  
淡々

必と嘆らり地代  
氷花

市原せよしそ七草葉をさ

仙鶴

長閑か中に籠ふ牛乃子

珍舎

榎乃山やふかき水不二の雲

我黒

梅れもよもよ松乃弘夕 珍舎

やよもあもたる月れ几丁そ也長

玉より猶小氣と生さゆら 黒

蜻の飯こちれてゆれる石と成 舎

はくも<sup>タケ</sup>て干定高門 長

くこしの傷不初て雷光黒

是や彼部吉のまどと舎

三ツ山や桂馬越よと忠あん長

弁天在と思ひ川とと黒

土子のふ今釣とく霞乃うん舎  
足袋

生々湯吞て痛々蒸々長

上カミと下いさうれい角の錢お場黒

恋れあふ女小秋乃小浪舎

回子丸浦小舟出とこれとと絶縁鏡長

月さうととま居とと懐黒

花風ふ板ぬと紙お積舎

親指チヂ継ツギ糸蛇のゆきとと筆





鳥の春子とて鳴  
出の秋とて鳴

作者の 叔僕

孫令吉 西月

秋思後

雪舟末孫等碩畧



大塚模刻

印行三百部之内  
第二九八號

大正十年七月廿五日印刷  
大正十年七月廿八日發行  
第二期  
第十三回  
編輯兼發行者 東京市牛込區富久町八十四番地 山田 清 作  
印刷者 東京市下谷區御徒町一丁目七番地 阿部 鋼五 郎  
發行所 東京市牛込區富久町八十四番地 米 山 堂  
電話號碼 三四六一  
電報掛號 三三〇九

